

むかしのくらしなぜなに Q&A

Q. どうして家のなかでたき火をしても火事にならないの？

A. “かまど”や“いろり”の火をそのままにしておくと、火事の危険があります。火を使いおわったら、燃えのこった炭は火消壺に入れました。火消壺のふたを閉めると、酸素がなくなって自然に火が消え、炭は「消し炭」になります。いろりの場合、炭を灰にうめることでも、火消壺とおなじように消し炭にすることができます。火を使う場所は燃えにくい材質でできています。それでも毎日きちんと火の始末をすることで、火事が起こらないようにしていました。



消し炭の入った火消壺

消し炭は火が付きやすいので、もう一度使ってムダにはしなかったニャ。



流しと水がめ



いちいち井戸からこの水がめまで水を運ぶのは大変だなあ。

Q. 水はどこから持ってきたの？

A. 府中に水道がとおりはじめたのは1958年です。それまでは庭にある井戸から水をくんで使っていました。1日に必要な量の水を運ぶために、何度も家と井戸を行き来しました。それはとても大変な作業だったので、水は大切に使いました。

この建物のガイドコロの奥には、流しと水をためる水がめがあります。調理や洗い物のときにすぐ使えるよう、井戸でくんだ水はそこにためておきました。

Q. トイレやおふろが外にあるのはなぜ？

A. トイレが家の外にあると、農作業でよごれたままでも気にせず使うことができます。

また、むかしは水を流さず、下にためておくトイレでした。家のなかにそんなトイレがあると、ニオイが室内にこもります。ためた大小便をくみだすにも、外にあった方が便利でした。

おふろはたき木を燃やせて、水を運びやすく、ぬれてもかまわない庭や土間のすみにありました。しかし、お湯をわかすためにはたき木をたくさん拾ったり買ったりする必要があるので、おふろをもたない家もありました。



農家の庭にあったむかしのトイレ
『府中市史近代編資料集(一)』より



むかしのトイレはこんな小屋だったんだニャ。夜に行くのはこわかった、という話はよく聞くニャ。

ほかにも家やくらしのことで気になることがあったら、博物館の人にきいてみてね！



こども版かいせつシート むかしの農家と そのつくり



はくぶつかん 博物館にあるむかしの農家 きゅうこうちけじゅうたく 旧河内家住宅

この家はもともと三鷹にありました。それを解体して府中に運んで建て直し、畑仕事やカイコの飼育などをしていた河内さんが住むようになったのは江戸時代の1844年のことです。何度かリフォームし



ながら、1976年まで使われていました。

この家は、むかしの農家のつくりがわかる貴重な建物でした。そのため、府中にあったむかしの農家や生活のあり方を未来に伝えていこうと、改めて解体し、博物館へと運んで建て直しました。その際は、カイコをたくさん育てていた1910年ころの姿に再現しました。



◀1969年ころにあった河内さんの家

左の図のように、家のまわりにも建物があつたニャ。さらに建物を囲むように木を植えて、風よけにしていたニャ！



旧河内家住宅のつくりと使い方

この家は、カヤとよばれるススキなどの細長い草の茎でふいた屋根と、土でできたかべ、木の柱など自然のなかにあるものを使ってつくられています。

家のなかは、いまのようにかべで囲まれた部屋はありません。“ふすま”や“しょうじ”などの引き戸で仕切られています。引き戸をとり外せば、ひとつの広い部屋として使用できます。必要なときに部屋を広くできるのは、農家だけでなく日本のむかしの家の特徴です。

入口を入ってすぐのところは**ダイドコロ** (1) とよばれた場所で、土間ともいいます。“かまど”があることでわかるように、調理をする場所でした。また、収穫した農作物の仕分け、農具の手入れ、わら細工などをする作業場でもありました。よごれてもいいように床を張らず土のままですが、かたくかためて使いやすくしています。



⑥かまど

はがま 羽釜などをすえて、ごはんをたいたり、お湯をわかしたりするところです。



⑦いろり

ゆか 床を四角に切って灰をしきつめて、火をたく場所。火の大きさにあわせて高さが変えられる自在鉤に、なべをつるして調理ができます。暖房や照明の役割もあります。



⑧かやぶき屋根

屋根に使っているカヤは植物のため、いたみます。そのため、屋根は数十年に一度の間隔で新しいカヤにとりかえます。

⑨土かべ

わらをまぜた土をぬったかべ。土でつくすることで、家の外の気温の影響をうけにくくなります。

⑩雨戸

雨や雪、風が家のなかに入らないようにする引き戸。夜の間や寒いときにも使います。使うときは、箱のような戸袋から引き出します。

⑪しょうじ

木のわくに和紙をはった引き戸。和紙は光を通すので、しょうじを閉めても家のなかが暗くなりません。

ダイドコロ (1) の右側には、4 つの部屋があります。ふだんはお客さんが使う部屋や、家族が使う部屋など目的によって使いわけます。しかし、部屋の使い方はそのときどきで変わりました。

ザシキ (2) はお客さんが来たときにおもてなしをする部屋でもありました。また、1950 年代ころまでは結婚式やお葬式を家で行うのがふつうでした。そのときは**デイ** (3) を中心にして、**ザシキ** (2) や**ヘーヤ** (4) も使いました。食事は主に**オカッテ** (5) でいろりを囲んでとりました。ねる時は**ザシキ** (2) と**ヘーヤ** (4) を使いました。

河内さんは部屋をこうよんでいたニャ。家によってはよび方がちがう場合もあるニャ。



①ダイドコロ

キッチンと作業場にあたる場所。夜や雨の日でもここで作業ができました。

②ザシキ

リビングと寝室をあわせたような部屋。夫婦以外の家族がここで寝ます。

③デイ

結婚式やお葬式で中心になる部屋。そのときは、となりのザシキやヘーヤの引き戸を外し、広い部屋にして使いました。

④ヘーヤ

主人夫婦と小さな子供の寝室。正面入り口から一番おくにあり、プライベートな空間です。

⑤オカッテ

食事のほか、家族がだんらんするダイニングのような部屋。近所の人や親しい人とはここで話をします。

家を見学する時は、入れない場所があるから注意してね！

